

■進化論あれこれ■

～ 14 ～



石井 正三氏

一八五九年、この進化論を書いた、チャールズ・ダーウィン（英国の自然科学者）の著作『種の起源』がロンドンで出版された。

二〇〇九年がこの出版百五十周年にあたり、日本医師会国際担当を拝命して海外の会合に出かけたとき、シカゴとオーストラリアで二回、ダーウィンの大きな展覧会に遭遇した。同時に、医学部学生の頃『種の起源』和訳を読んだ青春時代の思い出と、海外で邂逅することになり感懐があった。

類人猿がアフリカのジャングルという緑の高層アパートからサバンナに降り立ち、二足歩行が始まった。前足だった両手が自由になって、器用なものづくりができ、洞窟に絵を描いたりするヒトへの進化が起った。

大脳局在からみると、手の感覚と運動の領域は言語の領域と近接。従って、これらの領域が一緒に発達すると大脳のポリウムがグッと充実し、額が前上方に発達して現代人の相貌になってくる。

二十二歳で五年間の世界一周航海に出たダーウィンが、オーストラリアや大洋州の島々を巡り、それぞれの島の生物たちの多様性に感銘を受け、一八三九年『ビーグル号航海記』が出版された。アルフレッド・ウォーレスという年下の博物学者・探検

家が同様の経験から自然選択という概念を提唱するに至って、原稿として書き溜めていた『種の起源』の出版に踏み切ったと言われる。

社会常識を覆す学説

人類思想史から見ても、「適者生存」から「進化」が起るといふ道筋を示したことで、キリスト教社会では創造神という概念を科学が上書きするという、大きなエポックだった。

「人類は神が創った」といふ、社会常識を覆した「猿から進化した」という学説には大きなインパクトがあり、その余波は現在まで続いている。

ヨーロッパが新天地を発見、拡張を重ねて開拓し所有権を主張するといふ植民地時代の先陣争いは、学問的な智の世界でも続いている。先に論文として世に出した方がその分野では勝ち、特許申請などから経済的見返りを得るし、ノーベル賞など栄誉にも浴することになる。

IT（情報技術）の時代になってもこの原理は引き継がれているが、最近ではフリーウェアとして世に出して、経済的メリットは主張しない代わりに、公共に広く普及することを良しとする考え方も出てきた。

私自身も臨床の現場でのアイデアが実り、形になったことがあったが、日々の本業で社会貢献する充実で十分だった。

南半球の動物や植物たちの個性あふれる姿や生き方には興味が尽きない。空き時間を利用してシドニーやメルボルンとその周辺の水族館・動物園・植物園などを歩き回ったとき、この地帯の生物たちが示す変化の数々は興味深かった。

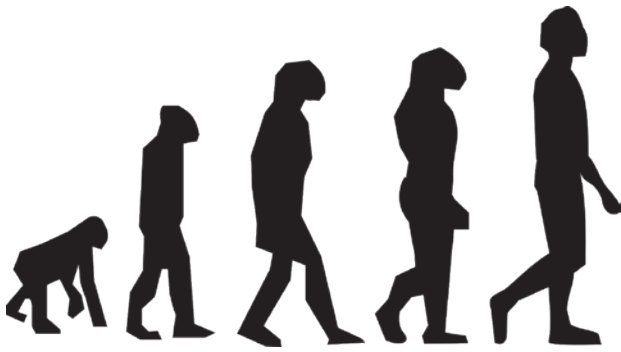
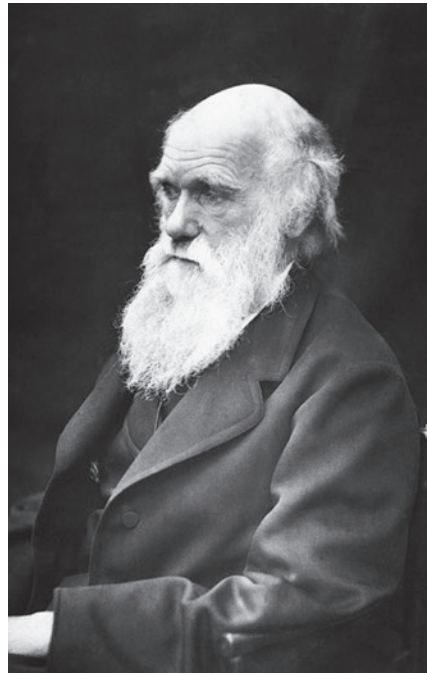
アボリジニの文化は文字を持たず、代わりに豊かな造形や色彩感に根差した絵画表現がある。音楽でも管楽器ディジュリドゥの独特の低音リズムは誠に面白い。先住民とひとこと言っても、実際には多くの集団に異なるスタイルがあったとも言われる。

多様性に感銘受ける

二足歩行が始まり、ヒトへ

先住民アボリジニの空間にヨーロッパから移民が入り、血腥い歴史も刻まれたが次第に共存の道を切り開き現在のオーストラリアに至る。

巨大な貝殻のような形をしたシドニーのオペラハウスは、完成後それほど経たず世界遺産に指定され、法隆寺と



「二足歩行」は類人猿から始まり、そしてヒトへ進化したと言われている(左のイラスト= Ciker-Free-Vector-Images による Pixabay から)。22歳の時に5年間の世界一周の航海に出たダーウィン(写真= Wikimages による Pixabay から)。島々に生きる動物たちの多様性に感銘を受け、その後、進化論を書いた『種の起源』を出版した、という

は随分違うなど感じていた。両翼に分かれたオペラハウスとコンサートホールにそれぞれ通って感じる素晴らしい音響と、シドニー湾の賑わいと自然環境に見事に溶け込んだ造形、そして二つのシェルをつなぐ境目から南十字星を見上げることができた時に、いささかの疑念は解消に至り、誠に畏れ入った。

建築途中で財政的困難に直面し、市民たちの熱意が後押しした運動で資金が生まれ、完成をみたそうだ。

二項対立には異論

いわき市に縁があると話されていた指揮者、岩城宏之が常任を務めたメルボルン交響楽団の演奏会では、英国のサー・アンドルー・デーヴィス指揮で聴いたマーラーの交響曲第二番「復活」の演奏が忘れ難い。

休憩なしで一時間半を超える大曲、観客席まで配置された管楽器群が会場全体を祝祭イベントに巻き込み、満員の聴衆を引き込む特別な時間だった。

アボリジニの土地柄に根付いたヨーロッパの伝統文化、日本人マエストロ岩城さんに鍛えられたオーケストラの底力、グローバルに結びついた連携の意味は深い。

日本人は、自然の圧倒的なパワーを畏れ崇めて、万物に神聖なものを感じて祈る姿勢を守ってきた。教科書で習った以上に、神と自然の二項対立の問題には未だに異論がある。

個体の生物学的変化・獲得形質は遺伝しない、サイコロの目のようにバラバラに分散した遺伝子の変化の中で、環境に適応した形質だけが受け継がれていくという原則で、絶えず変化していく生存環境に適応していけるのか論議も残る。

進化論は全米の教科書にあまり載せられていないという。神を宇宙人に置き換えて神話との整合性を図る発想も、消えてはいない。

二十一世紀の初頭に人類の遺伝子は総て読みとられた。病気の解明が進むとの期待も

あった。

しかし、ヒトの設計図で実際に機能していると読めるパーツは一部であり、その辺に棲息しているウイルスや細菌が潜り込んだ部分もありそう、土塊からヒトが造られたという伝承は存外真実に近いのかもしれない。

遺伝子の働きと生命の神秘の深い相互作用は更に今後の研究に委ねられている。

サル痘が問題になってきた。人類の試練は続きそうだ。

筆者プロフィール

石井 正三

(いしい・まさみ)

地域医療連携推進法人医療戦略研究所所長・代表理事、ハーバード公衆衛生大学院名誉武見フェロー、東日本国際大学健康社会戦略研究所所長・客員教授、医療法人社団正風会理事

